

## J-20 はいつ部隊配備されるか

漢和防務評論 20171209(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国国産の J-20 ステルス戦闘機は、中国メディアで近々部隊配備されるような報道がなされていますが、衛星写真では未だその形跡が見られません。J-20 の性能については、様々な論評がなされていますが想像の域を出ません。航空ショーでの飛行展示の際も、観衆が見たい内容の飛行展示は行わず、未だベールに包まれたままという状態です。しかし外観から見ると、ある程度の特徴は推測できます。それは、限定的なステルス性能、と巨大な機体から推測できる武器搭載量と長い航続距離です。中国空軍は、その特性を生かした運用をするはずですが。

KDR 香港平可夫特電：

中国の各種メディアは、J-20 のバッチ生産が開始されまもなく部隊に装備されるであろう、と報道してはいるが、2017年8月現在、J-20 が部隊配備された形跡は見られない。精鋭な航空兵第3、1、2、33、44等の師団は、団を旅団に改編した。簡単に述べると、1個団の戦闘機数は24機前後であったが、旅団になって30機となった。

今のところ、J-20 が2機、鼎新（甘粛省）の合同戦術訓練センターに発見され性能評価試験を行っていると思われる。この可能性は高い。ロシアでも新型戦闘機を正式に採用する前に、LYBETSK において国家が領収し、空軍が試験飛行を行う。



成都の J-20 製造会社の衛星写真 (Google)  
(20170728 の画像、J-20 が 1 機、J-10 が 7 機エプロンに見える)

J-20 に機種更新すると、従来機種にはない維持管理上の問題が付随して発生する。この点は、米軍の F-22、F-35 の整備支援を見ればわかる。格納庫はより大きくする必要がある。しかも密閉式である。格納庫内の温度は 22 度前後に保たれる。F-22、F-35 は、大量の先進式センサーを装備しており、当然風雨にさらしたまま放置できない。

次に J-20 の年産機数の問題である。KDR は 123 工場に新たに建設された工場大きさ及び現代式戦闘機の初期生産の経験から年産機数は十数機であると計算した。ロシア空軍の初期生産型 SU-57 の年産機数は 8 機である。F-22 の年産機数も数機であった。

このことから、J-20 の整備支援の煩雑さ、多くの検査機器を置く場所を確保する必要があること、等から格納庫は第 3 世代戦闘機の格納庫よりも大きくなる可能性がある。当然格納庫は密閉式でなければならない。格納庫の外形から判断すると、J-20 は戦略方向に配備される可能性が極めて高い。

ある種の説によると：J-20 の最初の配備先は西部戦区である、と。この説は合理性がある。しかも先例がある。J-10A は最初に陸良（雲南省）の航空兵第 44 師団に配備された。狙いは訓練の内容が東部沿海地区の敵対国家（日、米、台）に漏洩するのを防止するためであった。

先進型戦闘機が最初に配備されるのは、伝統的に航空兵第 3 師団の蕪湖基地（安徽省）である。ここは東部戦区に属し、現在、第 7、9 旅団が駐屯している。第 8 旅団は、最初に J-10A に換装された部隊の一つで、沿海地区の長興（浙江省）に駐屯し J-20 に換装される可能性は少ない。

SU-30MKK は最初に蕪湖に配備した。ロシア及びウクライナの SU-27 シリーズの専門家は、KDR に対し彼らが長期間蕪湖に出張していた、と述べた。

蕪湖に建設された巨大なスホーイ戦闘機の修理工場では、全空軍のスホーイシリーズ戦闘機の大修理を行っている。大修理の機械はウクライナから輸入したものであり、その後中国は自らスホーイ機のコピー生産を行った。それどころか現在は輸出までしようとしている。2017 年の衛星写真を見ると、飛行場の基本的な支援施設に大きな変化は見られない。J-20 を進駐させる場合は、格納庫を大改修しなければならない。このように見ると、1 乃至 2 年以内にこの基地に J-20 が進駐する可能性は小さい。

現在、J-16 多用途戦闘機（SU-30MKK の複製版）が頻繁に蕪湖に出入りしているが、換装するのか？可能性はある。SU-30MKK を J-16 に換装することは、完全に同じ性質の戦闘機であるため戦術的に適合し、技術的にも論理性がある。最初の SU-30MKK は 1999 年に輸入された。すでに 15 年使用しており、新型機ではない。大修理し、改修して初めて継続使用できる。また 15 年前のアビオニクスであり、一部の性能は J-16 よりも劣る可能性がある。SU-30MKK は全てがデジタル化されているわけではない。中国の SU-30MKK は、實際上同機種の BASIC 版であり、中国空軍の当時の作戦需要を臨時に満足させるための多用途戦闘機であった。

航空兵第 33 師団は重慶の白市駅及び大足の両大飛行場の駐屯している。早期には SU-27UBK 練習機が駐屯し、主としてスホーイシリーズ戦闘機のパイロット

訓練を行っている。近年来、同基地の戦闘機が頻繁にチベットのゴンカル、シガツェ飛行場に移動展開している。J-10 は航空兵第 44 師団から来ている。2017 年の衛星写真では白市駅及び大足の両飛行場では施設改修の形跡は見られない。ここ 1 乃至 2 年間で J-20 を配備できるのか？しかし中国の飛行場建設の速度は侮れない。通常 2 年前後で新しい飛行場や格納庫を建設している。

航空兵第 33 師団が遵義（貴州省）に移動する説がある。遵義飛行場は地下化され軍民両用飛行場である。KDR が大胆に予測すると、J-20 が軍民両用飛行場を利用することはまず考えられない。

再び陸良の航空兵第 44 師団の飛行場の状況を見る。同師団は J-10A に換装した最初の部隊である。今後の換装は J-10B/C になるはずだ。蒙自飛行場（雲南省）は 2017 年になって施設の維持整備がなされていない。最も新しい建設されたばかりの雲南駅基地（雲南省）は注目に値する。この基地は冷戦時代から南部で最も重要な空軍基地であった。現在は付近に HQ-12 地対空ミサイルが配備されている。ここでは先進的な後方支援施設は発見されていない。

注意すべきことは：J-20 のために全く新しい飛行場が建設される可能性があることだ。しかし現在、四川省、雲南省内には、新しい近代的な飛行場の建設は見られない。

滄州訓練センター（河北省）でも、新たな新型格納庫の建設や施設の改修は見られない。

このような状況から KDR は、次のように消極的な評価を行った：今後 1 年乃至 2 年以内に、J-20 のまとまった機数の配備はない、と。

現在、瀋陽航空機工場の J-16 の生産状況を見ると、今後 1 乃至 3 年間で一部の部隊が J-16 に換装される可能性がある。蕪湖基地の航空兵第 3 師団が最初に J-16 に換装される部隊となるか、注目すべきである。現在鼎新飛行場には少なくとも 8 機の J-16 が発見されており、戦術評価試験を行っていると思われる。2015 年から 16 年にかけて、相当数の J-16 が生産された。このため瀋陽（遼寧省）の工場には 10 個の新型格納庫が建設された。

KDR は、かつて SU-30MKK のニュースを報道した際に、次のように強調した：中国空軍は、内部で” SU-30 で台湾を打とう！”と叫んでいる、と。当時は貴重な戦闘機だったのである。したがって各飛行部隊は争って SU-30MKK を獲得しようとした。このため多くの部隊は定数を確保できなかった。例えば、長沙（湖南省）の第 18 師団等である。旅団に改編後は、30 機の SU-30MKK を装備している。したがって SU-30MKK 部隊は、3 個の新たな旅団を編成する可能性がある。残りの 10 機は依然として滄州訓練センターに配備される。このように分析すると：現在 SU-30MKK が配備されているのは航空兵第 3、29、18 師団の各 1 個団であり、もし第 3 師団が J-16 に換装をはじめると、余剰の SU-30 は旅団に改編されたその他の旅団（SU-30MKK 装備部隊）に補充される可能性が高い。或いは新たに SU-30MKK 団が編成される可能性もある。

たとえ新たな J-16 を保有したとしても、中国空軍は、SU-30MKK の戦闘能力を高度に重視している。この 2 年間、中国は SU-30MKK に使用する多くの新型武器を輸入する契約を行った。KDR は、契約の細部については報道しない。J-10C の状況については、別の分析記事で報道する。 以上